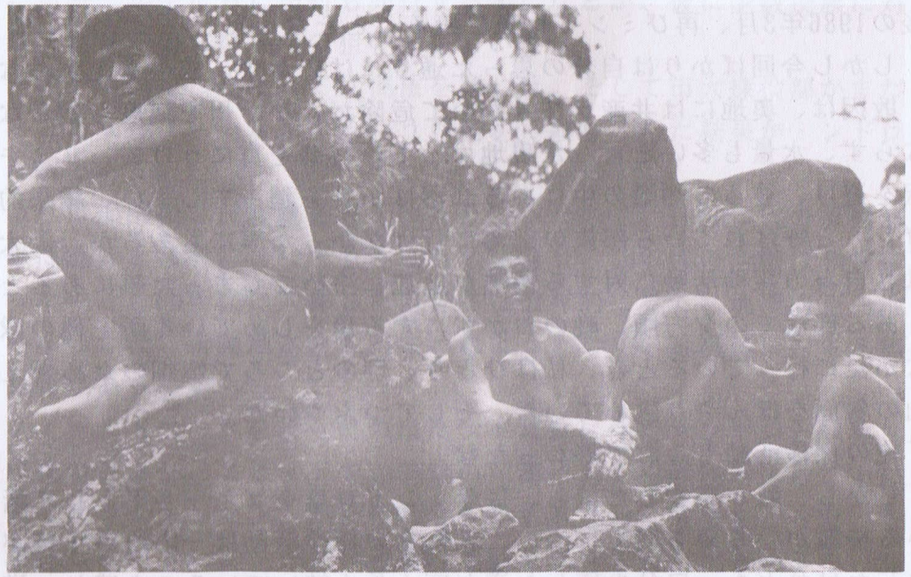

第3次～5次比国ミンドロ島遠征

田村康一

1985年夏、1年生だったわたしは、酒井さんと共にフィリピンへわたり、ミンドロ島のブヒッド族についての第1次調査をおこなった。調査といっても当時、探検の何たるかもわからず、民族学の予備知識もなかったわたしは、毎日何をするということもなく、怠惰にすごした。

酒井さんは、ブヒッド族の言語や文化についての調査をおこなっていたが、住みこんだバタンガンという集落があまりにもひらけすぎていたために、探検の対象としては魅力を感じられなかったようだ。山中でみかけた、「木の皮のふんどしで、髪の毛が腰まである男」の住むという、奥地の部落の探検を企てていた。

幸か不孝か、風邪で体調を崩した酒井さんにかわり、わたしがその“バゴン族”の集落を探しにいくことになった。ハヌノオ・マンヤン族のウィリアムという男にガイドをたのみ、腰まである川の徒渉を何度もくりかえして、“ホゴン・リゴマ”というちいさな村にたどりついた。ウィリアムによれば、そこはブヒッド族と“バゴン族”の混血部落だということだったが、バタンガンとちがって英語を話さない村人たちの言葉は、わたしにはまったく理解できなかった。

その夜は、村の穀物置き場のようなところで寝た。朝目覚めると隣には、ひからびた婆さんが知らぬ間に眠っていた。

ウィリアムがそれ以上、奥地にゆくのをいやがったので、ホゴン・リゴマで一泊した後、バタンガンに戻ることになった。そして酒井さんに、奥地の情報をつたえた。酒井さんは“バゴン族”にかなりの興味を抱いたらしく、半年後に第2次調査隊と称して、再びミンドロ島にむかった。しかしわたしは、個人的事情によって、その計画には参加できなかった。第2次調査隊は結局、“バゴン族”の接触と住み込み調査という目的を果せないまま終わり、酒井さんも探検部を引退した。

一年後の1987年春、第1次調査隊に参加したわたしと、第2次隊員の大槻、高梨が中心となって、本格的に“バゴン族探検”を目的とした遠征隊を組織し、三たびミンドロ島へわたった。過去二度の反省から、“バゴン族”との接触を第一目的とし、民族学的な調査は、言語の収集など基礎的なものだけにしぼった。また、事前の準備活動も徹底しておこなった。民族学の勉強はもとより、フィリピンの地域研究、野外でのデータの取り方やまとめ方、写真の撮影法、熱帯植物の知識などについて、研究会を開いた。また、朝日新聞を後援につけ、外部から資金や物資の援助を仰いだりもした。

現地入りしてからは、何かと理由をつけて奥地にゆくのを嫌がるガイドの横っ面を札束でひっぱたき、ひたすらジャングルをつきすすんだ。途中、おおきな部落には数日間滞在し、言語採集をしながらブヒッド語のマスターに努めた。前二回の遠征では、英語でコミュニケーションをおこなっていたので、現地語しか話さない部落では手も足もでなかった。その反省から、言語の習得には特に力を注いだ。

調査をすすめてゆく段階で、バタンガンのブヒッド族が“バゴン”とよんでいたのは“自分たちより奥地に住んでいる人”という意味で、蔑称的なニュ

アンスを帯びていることがわかった。その証拠に、“バゴン”とよばれている村の人に「あなたは“バゴン”ですか」とたずねると、かならず嫌な顔をして「“バゴン”ではない。ブヒッドだ。奥地の次の村に“バゴン”が住んでいる」とこたえた。そして次の村へいっておなじ質問すると、前の村で言われたことが、そっくりそのまま答えとして帰ってくるのであった。実際に言語調査をしてみると、かれらの言葉はバタンガンとおなじであった。ただ、バタンガンとちがう点は、かれらがまとまった集落をつくらずに、焼畑のサイクルにあわせた移住生活をおくっていることであった。つまり“バゴン”とは、相対的な意味で“奥地に住んでいる人”をさし、独立した言語グループを意味するものではなかったのである。

我々の“バゴン族探検”は、ブヒッド族の居住エリアをつきぬけて、島の西側から中央部に分布する、タウブイッド族の生活圏にたどりついたところでクライマックスをむかえた。結局、そこに到達するまで“ファーストコンタクト”の民族を“発見”することはできなかった。しかし、独立した言語グループの可能性があるとされていた“バゴン族”が、上に記したような意味をもち、奥地のブヒッド族をさしていたことがわかっただけでも、“客観的な事実の発見”をしたと自負して良いのではないだろうか。また奥地を探検する際に、30kgちかい荷物を背負って沢をつめ、熱帯のジャングルをコンパスで現在地を確認しながら突破し、そして山中でのビバークを何度も繰り返した。今にして思えば、かなり無謀なことをやっていたともおもえるが、国内での合宿や研究会の成果がストレートに海外遠征で発揮できたということで、この第3次ミンドロ島遠征隊は一応の成功をを収めたといってよいだろう。

おなじ1987年の夏、大槻とわたしの二人はミンドロ島にわたった。大槻は三回目、わたしは前年の無人島偵察を入れると、四回目のミンドロ島である。前回の“バゴン族”のような目玉はなかったが、わたしは奥地探検の際にヒントを得た、ブヒッド族の文化変容についての予備調査を計画していた。バタンガンのブヒッド族と奥地の“バゴン族”のパーソナリティを測定、比較し、両者のちがいから、開発による文化変容や社会変化が人々の心にあたえた影響を分析しようというのがその目的であった。しかし、雨季の訪問にくわえ、滞在中に台風の直撃を二回もうけて、十分なデータをることができなかった。またミンドロを訪問したあと、ミンダナオ島に飛ぶ予定だった大槻

は、ブヒッド族の村を出た直後、町のホテルで天狗熱にかかり、帰国までの静養を余儀なくされた。

結局、この夏の第4次ミンドロ島遠征は、ほとんど成果を上げられないままおわってしまった。

翌1988年夏、わたしは単身で五度目のミンドロ島へむかった。前回はたせなかったブヒッド族の文化変容についての調査を、卒論にまとめるためであった。そして、ロールシャッハ・テストなどのデータを予定通りあつめ、帰国後卒論を書いた。テーマは、『学校のある社会とない社会～ロールシャッハ・テストによる比較研究～』というものである。この卒論をもって、わたしは入部以来、四年間にわたるミンドロ島の山岳民族についての探検、調査に一段落をつけたのである。

わずか四年の間でも、ブヒッド族の生活の変化には目をみはらされるものがあった。とくにバタンガンなどは、最初のころとは比較にならないほど物質的に豊かになり、村の人口は増加の一途をたどっている。その反面、生活の基盤である焼畑をおこなう耕地がすくなくなり、土壌の再生力を無視して短いサイクルで焼畑をおこない、その結果土地の荒廃を招くといった悪循環が生じている。そして、土地をうしなった村人が低地フィリピン人のもとで小作人化したり、盗みを働いたりするようなケースも頻繁におこるようになった。

また、われわれが集中的に一定の地域を訪問したために、そこの村人に悪影響をおよぼした例もすくなからずあった。最初のころは写真をとられるのも恥ずかしがっていた村人が、そのうちに自ら写真を撮るように要求し、次回の訪問でそのプリントを持参するようしつこくせがむようになった。わたしはそのため、ある時期から人物写真を撮ることをやめてしまったほどである。また、無理に奥地を案内してもらったバタンガンの若者に金を払いすぎたために、その若者がまじめに働かなくなって、村をおいだされたということもおこった。

ミンドロ島は探検部にとって、いまだに未知の魅力を秘めたフィールドである。しかし、探検の対象となる奥地の人々のくらしが、今とおなじ状態でつづくのはそんなに長いことではないだろう。また、そんな“未知”をもとめて探検するわたしたち自身の存在が、しらずしらずのうちにかれらのくら

しに影響をあたえていることは、皮肉なことだが事実である。

わたしが卒論のフィールドワークで、ブヒッド族の集落に滞在していたとき、後輩の佐藤と佐々木がおなじミンドロ島の“ルワン族”という未発見の民族の探検のため、予備調査をおこなっていた。かれらは島の東北部からアプローチし、中央部の山岳地帯に入り込んで“ルワン族”に接触しようと計画しており、現在もその試みは継続中である。

市大探検部がミンドロ島で展開している民族探検は、先輩の酒井さんからわたしたちにうけつがれ、そして今、佐藤らにバトンタッチされた。酒井さんやわたしたちが成功した点、失敗した点をふまえ、この息の長い計画が後輩たちの手によって、いつか大きな実を結ぶように、わたしは期待している。

第３次比国ミンドロ島遠征

［期間］　1987年 2月24日～ 4月 7日
［地域］　フィリピン共和国ミンドロ島
［目的］　バゴン族との接触および言語調査
　　バコ山（2488m）登頂
［隊員］　隊長・渉外　大槻英二　（文理学部２年）
　　副隊長・装備　高梨洋之　（商学部２年）
　　食糧・会計　田村康一　（文理学部２年）
　　記録　小嶋健太　（文理学部１年）
　　医療　大沢啓志　（文理学部１年）

第４次比国ミンドロ島遠征

［期間］　1987年 8月 1日～ 8月30日
［地域］　フィリピン共和国ミンドロ島
［目的］　ブヒッド族の文化変容に関する予備調査
［隊員］　大槻英二　（文理学部３年）
　　田村康一　（文理学部３年）

第５次比国ミンドロ島遠征（ブヒッド族調査）

［期間］　1988年 7月27日～ 9月 2日
［地域］　フィリピン共和国ミンドロ島
［目的］　ブヒッド族の文化変容に関する比較調査
［隊員］　田村康一　（文理学部４年）